

# 私のまちにも ふるさとが



## ◎古八幡宮

祭神は本社の三俣八幡宮の分霊を仰ぎ、仲哀天皇、応神天皇、神功皇后を祀っている。

昔は、大きな神殿と広い馬場をそなえた、立派な宮造りであったが、火災で神殿は焼失し、洪水で馬場は流失した。寛文六年（一六六六）神殿再建が許可され、その後、部落で新しく神殿を元の位置に建てた。

十月七日の祭礼に腰輪踊を奉納する。一九九三年が四〇〇年祭に当る。

浅田部落の西側に小山がある、この丘陵地に「古八幡宮」は奉祀されている。祭神は三座で、御神体は三十種位いの木造である。

御脇立様として、龍王権現、金比羅宮、大幡宮、荒神宮を祀っている。

神殿の造営、祭祀年月は判明していないが弘安年間（一七七八～一七九三）と言ひ伝えてきている。りっぱな宮造りを備えていた。

濱殿は現在の原家の宅地南西の地で、高さ六十糎～九十糎、面積約一〇〇平方メートルであった。祭礼当日はこの濱殿まで御神輿が御神幸になり、腰輪踊りを奉納した。

その後御還幸になる、この神事は今日も捨たることなく続いている。

馬場は古八幡宮より濱殿まで約二〇〇米あって流鏝馬も行われていた。

社務所は宮下鳥居の北側にあった。神主は古屋氏で系図等がないので定かでないが、明治初年まで奉仕されていたが死去され家族は豊浦郡方面へ転居されたという。

元和、寛永の頃（一六一五～一六二四）野火の延焼に会い、神殿の他宝物類残らず焼失した。その後再建が進まずそのままになっていくうち、洪水で馬場も流失してしまつた。

その後氏子の努力により寛文六年（一六六六）神殿のみ再建を許された。そのときは馬場はなく神殿地も縮小されていた。

再建の話もようやくまとまり延享二年（一七四三）もとの位置へ新しく神殿を再建して、祭礼も昔の様に執り行うようになった。

文化三年（一八〇四）石段の造築、灯ろうは文化三年、四年に奉寄進されている。

浅田の古老の江藤によると、文化十二年当時、八幡宮が村内に二社あったので浅田の八幡宮を「古八幡宮」と号するようにして、「古八幡宮」の額を掲げたところから、この頃市の八幡宮へ合祀されたと思われる。

絵馬は文政六年（一八一八）と書いてあるものがあるように、この頃に現在のように整備されたものである。

この様に再度立派に造営されて盛大な祭礼が行われたことは、当時の三ヶ村（浅田、沢江上ゲ、沢江浦）の人々が自然の災害からの加護をこの氏神へ祈った真剣な気持ちの表れであることがうかがえる。今日もその神事の一部が残っており、境内には「ばしよ翁」の句碑がある。

「海くれて、鴨の声ほのかに  
白し」  
田村 守

## 文芸

### 清風句会

#### 清風俳句会

町長杯鯨寺吟行・四月例会  
（順不同）

異人墓六島村は遠がすみ  
田村 九重

青き踏む二三歩試歩の松葉杖  
滝川 旬一

蟻老いて鯨回向へ春の寺  
宮本ミネ子

老二人野の幸摘みて時忘れ  
踏青や長門法座に生かされ

踏青や長門法座に生かされ  
踏青や長門法座に生かされ

踏青や長門法座に生かされ  
踏青や長門法座に生かされ

踏青や長門法座に生かされ  
踏青や長門法座に生かされ

余花の庵尼僧誦経すひねもすを  
宮垣ヒサ子  
青き踏みあの山の川なつかしく  
みちのくも春来りぬと孫の声  
舟酔いのこちちまだあり青き踏む  
花便り十日余りで駆けめぐり  
齊藤 元

海神に昔の春をソ連墓  
山中 重代

春の陽を片手によけて尼僧往き  
春の軒眼に塩ためて干魚かな  
村岡 千代

花万朶バス待つひまのほつ句心  
桜もちたまには玉露淹れもして  
上田 雪子

母と子の影もやさしや青き踏む  
仏壇の桜餅下げ来客に  
因藤 茂子

草若し庭に園児とごろ寝して  
保育園一日保母の花見宴  
岩本さつき

観光船白き水尾ひき春の海  
春潮に銀鱗まぶし紫津の浦

## 寄付



このたび、古くから活動を つづけてこられました、豊原の「豊原庵」が廃屋になるにあたり、最後まで残られました尼僧から町の社会福祉事業に使ってくださいと、金一封のご寄附がありました。